

第 24 章 主要地域別の概要

1. ラオスの地域分類

ラオスは地理的に、北部、中部、南部の 3 地域に区分される。サワンナケート県は一般的に南部に区分されるが、5 年に 1 度行われるセンサスの 1 つラオス支出消費調査 (Lao Expenditure and Consumption Survey; LECS) や電力グリッドのように、中部として扱われることもある。

北部は山岳地域に盆地が点在しており、耕地に限られるため、人口密度が低い。中部はビエンチャン平野を除けば山岳地帯が多く、メコン河沿いなどに狭い平野が若干見られる程度である。南部は、サワンナケートやチャンパサック県のメコン河沿いに比較的広い平野が広がっている。

図表 24-1 ラオスの地域・県別の面積と人口

県/地域名		面積		人口	
		(km ²)	(%)	(人)	(%)
北 部	北 部	96,925	40.9	2,026,406	31.1
	ポンサリー	16,270	6.9	179,822	2.8
	ルアンナムター	9,325	3.9	171,967	2.6
	ウドムサイ	15,370	6.5	314,269	4.8
	ボケオ	6,196	2.6	173,962	2.7
	ルアンパバーン	16,875	7.1	463,485	7.1
	フアパン	16,500	7.0	333,762	5.1
	サイニャブリー	16,389	6.9	389,139	6.0
中 部	中 部	74,010	31.3	2,258,688	34.7
	シェンクアン	16,358	6.9	282,769	4.3
	ビエンチャン県	22,554	9.5	506,881	7.8
	ビエンチャン特別市	3,920	1.7	797,130	12.2
	ポリカムサイ	14,863	6.3	281,207	4.3
	カムアン	16,315	6.9	390,701	6.0
南 部	南 部	65,865	27.8	2,229,338	34.2
	サワンナケート	21,774	9.2	937,907	14.4
	サラワン	10,691	4.5	384,438	5.9
	セコン	7,665	3.2	103,326	1.6
	チャンパサック	15,415	6.5	670,122	10.3
	アタプー	10,320	4.4	133,545	2.0
全 国		236,800	100.0	6,514,432	100.0

(出所) Lao Statistical Bureau, Lao Statistical Yearbook 2012

ラオスの地域別の消費額を見ると、中部が一番多く、北部と南部はほぼ同じ金額である。このラオス支出消費調査では、サワンナケート県が中部に含まれている点に注意を要する。県別で見ると、北部のサイニャブリー県が月 300 万キープ台と最も多く、次いで中部のビエンチャン特別市、サワンナケート県、シェンクアン県、南部のチャンパサック県、北部のルアンパバーン県が月 200 万キープ台でこれを追っている。住民の自給率を見ると、ビ

エンチャン特別市が 5%で最も低く、ついで北部のサイニャブリー県やルアンパバーン県、パクセーのある南部チャンパサック県、中部のサワンナケート県なども比較的 low、商品経済化が進んでいることが分かる。

図表 24-2 ラオスの地域・県別の消費額と自給率

地域	県名	消費額 (千キープ/月)	自給率 (%)
北 部	北 部	1,976	29.5
	ポンサリー	1,259	50.5
	ルアンナムター	1,655	34.1
	ウドムサイ	1,735	37.8
	ボケオ	1,279	42.0
	ルアンパバーン	2,178	21.6
	ファパン	1,472	48.8
	サイニャブリー	3,035	18.5
中 部	中 部	2,389	19.0
	シェンクアン	2,191	30.0
	ビエンチャン県	1,858	26.8
	ビエンチャン特別市	2,389	5.3
	ポリカムサイ	2,019	26.2
	カムアン	1,871	32.8
南 部	南 部	1,948	26.8
	サラワン	1,456	42.5
	セコン	1,519	35.3
	チャンパサック	2,300	20.2
	アタプー	1,760	30.4
	全 国	2,171	23.4

(注) 消費額とは、支出額と自給自足分を金額に換算した合計である。

(出所) 4th Lao Expenditure and Consumption Survey (FY 2007/08)

ラオス工商業省の地域別・県別の工場数を見ると、大・中・小規模の合計では中部のビエンチャン特別市、ポリカムサイ県が 2,000 カ所を越えて多い。しかし、これは必ずしも実態を反映しているとは言えず、むしろ大工場の数字を見た方が実感に近い。すなわち、ビエンチャン特別市が 138 工場と圧倒的に多く、ルアンパバーン県、サワンナケート県がこれに続く。

ひとくちメモ (20): ラオス山岳地域の開発と不発弾

第 2 次インドシナ戦争中、ラオスとベトナムの国境に近い山岳地域を支配する左派勢力（現政権に繋がる）は北ベトナムと協力していた。北ベトナムは、北緯 17 度にある軍事境界線を越えて、南ベトナム領内で展開する解放勢力（ベトミン）を支援するため、中立国であるラオスの左派勢力支配地域を通して物資の供給を行ったが、この物資供給ルートをホーチミンルートと言う。アメリカ軍は、ホーチミンルートを遮断するために激しい空爆を行ったので、現在でも土中には多くの不発弾が残っている。日本を始めとする各国の支援によって不発弾処理が行われているが、毎年、農作業等で地面を掘り起こし、不発弾が爆発するケースは少なくない。これらの地域で、大規模な農業開発、植林事業、鉱山開発、道路建設などを行う際に不発弾処理は 1 つの大きな課題となっており、ラオスでも発展の遅れる山岳地域の開発を妨げる原因となっている。

図表 24-3 ラオスの地域・県別の工場数

地域	県名	工場の規模			県別・小計		地域別・小計	
		大	中	小				
北 部	ボンサリー	-	-	136	136	1.3%	1,508	14.8%
	ルアンナムター	11	2	126	139	1.4%		
	ウドムサイ	2	23	218	243	2.4%		
	ボケオ	10	39	183	232	2.3%		
	ルアンパバーン	55	61	202	318	3.1%		
	フアバン	3	24	97	124	1.2%		
	サイニャブリー	46	40	230	316	3.1%		
中 部	シェンクアン	14	14	111	139	1.4%	7,051	69.0%
	ビエンチャン県	34	29	189	252	2.5%		
	ビエンチャン特別市	138	170	2,249	2,557	25.0%		
	ポリカムサイ	34	51	2,237	2,322	22.7%		
	カムアン	23	25	1,733	1,781	17.4%		
南 部	サワンナケート	28	56	1,048	1,132	11.1%	1,664	16.3%
	サラワン	19	13	251	283	2.8%		
	セコン	10	6	81	97	0.9%		
	チャンバサック	20	13	89	122	1.2%		
	アタプー	7	16	7	30	0.3%		
全国・合計		454	582	9,187	10,223			

(出所)ラオス工商省

2. 地域別の経済動向

(1) 北部

北部では中国に隣接するボンサリー県、ウドムサイ県、ルアンナムター県で、近年、中国人の流入が多い一方、タイに接するボケオ県やサイニャブリー県のメコン河沿いはタイの影響が色濃い地域である。

北部では、古都でユネスコの世界遺産都市として登録されているルアンパバーンが最大の都市であり、ホテル・レストラン業をはじめ観光産業が発展している。

ウドムサイはラオスを南北に貫く幹線道路である国道13号線と、ベトナム・ディエンビエン省からタイ・ルーイ県へ抜ける国道2号線の交点に当たる交通の要所として栄え、中国資本のホテル、レストラン、商店などが多く、中国色の強い町である。

中国国境のポーテンからルアンナムターを通りタイのチェンコンまでは、タイ・ラオス・中国の資金で国道3号線が整備され、国道3号線南端のラオス・ファイサイとタイ・チェンコンのあいだを流れるメコン河には、2013年12月に第4友好橋が開通している。中国国境のポーテンからウドムサイを経由してルアンパバーンまでも中国の援助で道路が整備されつつある。タイと国境を接するサイニャブリー県内の道路は、タイの援助で整備が進んでおり、ビエンチャンから北部へのルートは従来の国道13号線だけでなく、メコン河に沿った国道10号線を使いサイニャブリーを経由してウドムサイに抜ける道も整備されつつある。

中国の援助による、中国国境のポーテンからルアンパバーンを経由してビエンチャンに至る高速鉄道の建設計画もラオス＝中国両政府の間で合意が結ばれている。中国政府は、この高速鉄道をビエンチャンから更にバンコク経由でシンガポールまで延ばしたいと考えている。ルアンパバーン国際空港は中国の援助により、空港ビルと滑走路の拡張が行われ、2013年に完成・運用を開始している。

ひとくちメモ(21): 中国人がやってきて行うラオス北部の農業

中国に近いルアンナムター県を中心にラオス北部では、近年、高い人口密度のために農地の足りない中国から、隣国に目をつけた中国人がやってきて自ら農業を行っている。ラオス人から年間1ヘクタールあたり1,000ドル程度で土地を借りて、バナナやスイカを生産する。収穫期には中国から大量のトラックが来て、ラオスで箱詰めされたバナナやスイカが運ばれていく。ラオスの農業生産では伝統的に化学肥料や殺虫剤などはほとんど使われてこなかったが、中国の農民は本国と同じように、大量の農薬を使って農産物を作る。中国人がラオス国内で作った野菜はラオスの市場でも売られており、中国国内の残留農薬問題はラオスも無縁ではなくなっている。

ラオス北部で唯一、メコン河の西岸にあるサイニャブリー県では両岸がラオス領であることを生かしてメコン河本流にサイニャブリー・ダム(1,260MW)と、地力で採れる褐炭を使ったホンサー・リグナイト火力発電所(1,800MW)の建設がタイ資本によって進められている。メコン河支流のカン川、ウー川では中国資本によって水力発電ダムの建設が進む。

山岳地帯にはモン族、ヤオ族、カム族、アカ族など少数民族が多く、焼畑耕作が盛んである。ルアンパバーン県では、1990年代後半に植林を奨励されたチークが生長し、チークを加工する製材所が増えつつある。また、2000年代半ばから住民の間で急速に栽培の広まった天然ゴムも樹液が取れるまで成長してきている。タイ国境のメコン河沿いではタイ向けの飼料作物としてトウモロコシの栽培が多く、中国国境近くのルアンナムター県やポンサリー県では中国人の手により中国向けにスイカやバナナ、茶の生産が広がりつつある。



(田植えをするボンサリー県のレンテン族の子供)

(2) 中部

中部の中心は首都ビエンチャンである。ビエンチャン市内や国道 13 号線沿いに工場の建設が進んでおり、地方、特に北部各県から大量の若年人口が流入し、工場でワーカーとして働いている。ビエンチャン中心から 22km のところには経済特区 Vita Park があり、近年、外国資本の工場が次々と建設されはじめた。国道 13 号線北では、ビエンチャンから北へ 30~50km の道路沿いに、縫製、靴、医療機器などの日本企業の工場が点在する。ビエンチャン市内からタイとの国境である第 1 友好橋までのタードゥア通り沿いには、製薬、ビール、タバコなどの比較的大きな工場があり、日系企業でもバイク、電気部品の工場がある。

国道 13 号線南は、ボリカムサイ県で国道 8 号線、カムアン県で国道 12 号線が分岐し、分岐した 2 本の道路はそれぞれ東へベトナム国境まで延びる。国道 8 号線はラオス中部からベトナム・ハイフォン経由で日本へ商品を輸送する際に利用される。メコン河にはカムアン県タケークにタイと結ぶ第 3 友好橋がかかっているほか、ボリカムサイにも第 5 友好橋の建設が計画されている。

ビエンチャン平野を流れるナムグム川とその支流は、ラオスで最も古い水力発電ダムであるナムグム 1 ダム (1971 年完成) のほか、ナムグム 2、ナムグム 5、ナムリーク 1/2 など多くの水力発電所が完成・稼働している。カムアン県では、2014 年時点でラオス最大のナムトゥン 2 ダム (1,088MW) が 2009 年に完成し、発電量の 90% がタイへ輸出されている。中部では、日本企業の出資するナムグム 3 ダム、ナムニアップ 1 ダムの建設も進んでいる。

カムアン県でナムトゥン 2 ダムの建設が進められていた 2000 年代後半は、ダムの貯水池として水没する地域から大量の木材が伐採され、製材業が盛んであった。現在は、ボリカムサイ県での道路建設に伴う木材が多く出てきており、製材所もカムアン県からボリカムサイ県へ移りつつある。

ビエンチャン特別市の北に広がるビエンチャン県は鉱産物が多く、オーストラリア資本のプーピア金・銅鉱山のほか、亜鉛、鉛、バライトなどを産出し、日系企業も銅の探鉱を行っている。ビエンチャン県北部にあるヴァン・ヴィエンは石灰岩の山が連なる観光地であるが、すぐ近くには石灰石を使った中国資本のセメント工場があり、現在、第 3 工場を建設中である。シェンクアン県には鉄やシリコン鉱山、カムアン県には錫鉱山がある。

(3) 南部

南部はフランス植民地時代からベトナム人が多く住み着いた地域で、サワンナケートとパクサーという 2 つの大きな都市があるが、現在でもベトナム系住民の割合が多い。

サワンナケートはタイとベトナムを結ぶ東西経済回廊 (国道 9 号線) のラオス西端、メコン河沿いの町である。国道 13 号線と国道 9 号線の交点にセノという町があり、サワンナ

ケートとセノを結ぶ約 30km の地域に、サワン＝セノ経済特区がゾーン A～D の 4 カ所に分かれて点在する。

パクセーは、ポロベン高原で栽培されるコーヒーや高原野菜の集散地としてメコン河沿いに発展した町である。パクセーはサワンナケートと並ぶ大都市で、後背地となるサラワン、セコン、アタブー県を含めれば人口規模も比較的大きいが、2014 年現在、パクセー及びその周辺に経済特区はない。

南部では東西経済回廊（国道 9 号線）のほか、国道 18B 号線がベトナム国境まで綺麗に舗装されている。サラワン、セコンから、それぞれベトナム国境へ伸びる道路が 2015 年の完成を目指して建設中であり、これら 2 本の道路が完成すれば、南部だけで 4 本の幹線道路によってベトナムと結ばれることになる。

サワンナケート県にはタイ最大の製糖会社が工場を建設し、サトウキビの生産を奨励している。ポロベン高原ではコーヒーやキャベツ等の高原野菜の栽培が盛んであり、野菜はパクセーを経由してタイ・バンコクまで運ばれ、バンコク市内のスーパーに並ぶ。パクセーからポロベン高原方面へ少し入ったところにはベトナム系ラオス資本による大規模なインスタントコーヒー工場がある。ラオスから日本への最大の輸出品目はポロベン高原で生産されるコーヒーである。ポロベン高原では日本企業によって漢方薬原料の栽培も行われている。

ポロベン高原では豊富な水力を利用して、多くの水力発電ダムが計画・建設中である。水力発電の建設に伴い、ダムの貯水池に沈む森林から産出される木材が多く、ベトナムへ輸出される。南部にはベトナム資本による大規模なゴム園があるほか、日本企業によるユーカリやアカシアの植林も盛んである。

サワンナケート県にはオーストラリア資本によってセボン鉱山が開発されたが、2008 年のリーマン・ショックが原因で、現在は中国資本となっている。また、ベトナム・カンボジア・ラオスの国境付近は世界でも有数のボーキサイト鉱床があり、各国で探鉱が盛んに行われている。ラオスでも日系企業を含め多くの外資企業が、ボーキサイト鉱床の調査を行っている。



(南部セコン県の少数民族の村)